

作物名：日本なし

病害虫名：黒星病（病原： *Venturia nashicola* ）



果実病斑部の裂果



芽基部病斑



葉の病徴（春型病斑）



果実病斑（幼果）



りん片病斑



葉の病徴（秋型病斑）

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・りん片、芽基部、葉、果実及び新梢に発生する。新梢では緑枝時期に病斑を形成する。
- ・りん片には4月中旬頃に不整形で黒色すす状またはビロード状の病斑を生じ、脱落后は芽基部に病勢が進展し芽基部病斑となる。
- ・葉柄、中肋、果梗には楕円～縦長の黒色すす状の病斑を形成する。葉柄に病斑が形成されると、のちに落葉することが多い。葉肉には不整形の黒色すす状の病斑を形成する。
- ・果実では、円形の黒色すす状の病斑を生じ、のちにかさぶた状となり、裂果や落果となる。

2 伝染源及び伝染方法

- ・一次伝染源は前年の被害落葉上に形成された偽子のう殻から放出される子のう胞子と芽基部病斑上に形成された分生子である。
- ・子のう胞子の飛散は3月下旬～5月下旬で、芽基部病斑上の分生子の飛散は4月中旬～6月中旬で、展葉や開花とともに感染するため、開花期前後が重要な一次感染期となる。
- ・子のう胞子、分生子ともに降雨により飛散し、分生子は二次伝染を繰り返す。

3 発病・伝染好適条件

- ・本菌は糸状菌の一種で子のう菌類に属し、菌の生育適温は20℃、発病適温は15～20℃である。
- ・感染には降雨が重要な要素であり、15～20℃前後で多湿条件が続くと多発しやすい。気温5～25℃の範囲では、葉の濡れ時間が12時間で感染が成立する。
- ・本病の感染～発病までの潜伏期間は、葉では最短で10日、展葉後の日数経過に伴い長くなり、通常14～30日である。果実での潜伏期間は、最短で14日、通常25～30日である。
- ・果実では、品種の中でも幸水が最も感染しやすく、開花40～50日後に一旦感受性が低下するが、幼果期および開花60～85日後の感受性が高く感染しやすい。

4 防除対策

- ・窒素が多いと発生しやすいので、適正な肥培管理を行う。
- ・薬剤防除は予防に徹し、茎葉の繁茂状況に応じて、散布むらのないよう十分な量の薬液をていねいに散布する。

- ・開花期前後は本病に感染しやすいので薬剤防除を徹底する。
- ・春先の芽基部病斑は重要な一次伝染源なので、基部から切除し適切に処分する。その後、発生する被害葉や被害果の病斑は二次伝染源となるので、摘み取ってほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ・収穫後は落葉前までに、翌春の芽基部病斑の原因となるりん片部への感染防止のため、予防剤散布による秋季防除を行う。
- ・休眠期には、被害落葉による越冬菌密度を減らすため、落葉は土中埋設するなど適切に処分する。

5 その他

- ・宮城県内では 1990 年にベノミル剤耐性菌が確認されている。

6 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会），ひと目でわかる果樹の病虫害第二巻（日本植物防疫協会），農業総覧原色病虫害診断防除編5（農文協），農業総覧病虫害防除・資材編5（農文協），千葉県農業試験場特別報告第22号
- (2) 写真：宮城県農業・園芸総合研究所，宮城県病虫害防除所撮影